

UDLM

11

vol.325

November 30th
2022

私たちの、
まちづくり

p.2-5 M1によるPJ座談会実施！

p.6 備忘録

- 修士2年生6名、一年半の活動期間を通して -

都市デザイン研究室の M1 メンバーで PJ 座談会を実施

都市デザイン研究室メンバーの多くが、修士生活の中で時間をかけて積極的に取り組むプロジェクト活動。夏休み明けの9~11月は、そんなプロジェクト活動のひとつの区切りとも捉えられる社会実験が多く実施される時期です。ひとつの節目を越えた今、学生たちは何を思うのでしょうか。

今回は、実際に現在プロジェクト活動に参加している m1 のメンバーを集め、プロジェクト活動そのものについてや、社会実験の内容・意義、日頃活動を行う中で考えていることや他のプロジェクトメンバーへのお悩み相談など、ざっくばらんに話し合う「M1 座談会」を実施しました。



■上野 PJ | 9/24.25

Peace of Light/Beer !

プロジェクトの概要 2017年～
地元商店会やビルオーナーと連携し、上野の山とまちを繋ぐことを目指した勉強会や、まちの空き空間の利活用に取り組む。

社会実験の概要
不忍池のほとりに建つ水上音楽堂で開催されたイベントに合わせて、不忍池から仲町通りにかけてテラス席を設置し、路上ビアテラスを開催。不忍池周辺では試験的に照明を設置した。道路利活用や、夜間の歩行環境の改善に向けたフィードバックを得た。

■富士吉田 PJ | 10/8.9.22.23

ヒモトキ・ミチオリ
-新倉と下吉田をつなぐ4日間-

プロジェクトの概要 2017年～
富士吉田市役所の方々と共に、富士吉田市のまちづくりに取り組む。現在は下吉田地域を中心にウォークアブルな街の実現を目指している。

社会実験の概要
車社会の富士吉田市において、街の回遊性を向上し、まちなかを歩いてもらうための社会実験。市内の有名な二つの浅間神社を結ぶ道に織物の街ならではの布の装飾や、廃材で作ったベンチの設置・滞在空間の創出を施し、歩きやすくなる道づくりを実践した。

■手賀沼 PJ | 10/22

手賀沼ウィークエンド

プロジェクトの概要 2017年～
かつて日本一汚い沼と言われた手賀沼を、沼辺の環境を肌で感じるここのできるパブリックスペースとしてリデザインする。

社会実験の概要
イギリスの自然保護団体が作成した自然体験のリスト『12歳になるまでにやるべき50のこと』に倣い、手賀沼バージョンのリストを作ることで沼辺がより魅力的な活動の場となることを目指す。その一環としてウィークエンドではリストの一部を実践してもらった。

■みなかみ PJ | 10/29.30

ミニ廃墟再生マルシェ

プロジェクトの概要 2021年～
みなかみ町・群馬銀行・オープンハウス・東大の4者で提携を結び、町の総合再生を目指し、水上温泉街内の廃墟再生・活用に取り組む。

社会実験の概要
温泉街にある廃墟、旧ひがきホテル社員寮を、草に埋もれた状態から、地元の方々と共に再生し、「みなかみの掘りだしもの市」をテーマに、みなかみの良さを再発見するマルシェを開催。この場所の長期計画を見据え、社員寮の活用実験を行なった。

■宇治 PJ | 11/23

まちにわワークショップ 第5弾

プロジェクトの概要 2019年～
路地や広場など市街地に現れる空間を「まちにわ」と定義し、それらを繋げることで回遊性を向上させるまちづくりに取り組む。

社会実験の概要
実際の体験を通じて地域住民にまちにわへの愛着を持ってもらうことを目的とした「まちにわWS」を昨年度より実施。11月には5回目として市や地域の社会法人、文教大やSFCなどと合同で開催し、スタンプラリーなど子供達も楽しんでまちを巡る企画も行った。

研究室のプロジェクト活動において 大学という立場として求められているもの

長谷川 上野PJは他のプロジェクトと比較して、目的がひとつははっきりしているなど感じた。道路空間の効率的な活用に向けて、仮説を立てて検証する、まさに「実験」だね。

永井 例えばみなかみPJは、もう少し目的がふわわとしていて、その中での個々のアクションを進めているイメージ。でもそれは、まだプロジェクトとして上野PJ程の段階に至っていないというのが原因だと思う。

橋 上野PJも確かに「いけとまちをつなぐ」という大きなテーマはあるが、それ以上のアプローチはさまざま。中でもしのばずナイトテラスはまさに「実験」。人の動線や滞在時間について観察したり、交通量調査を行ったりしてデータを集めている。



テラスの設置により通りを人の居場所にした様子

音山 プロジェクトにおける、大学のスタンスとして、それがあべき姿なのではないかと思う。これは先生も言っていたことだけど、最近の悩みとして、プロジェクトは本来参与観察などの学術的な側面をもっとしっかりしていくべきなのに、最近のプロジェクトは学生コンサルみたいになっているという一面があると感じている。

橋 上野PJでは、「しのばずいけまち研究会」という商店会の人たちが集まる勉強会が月に一度くらい開催されているのが大きいかもしれないね。その組織が既に確立されていて、そこに働きかけると割と色々なアクションを起こすことができるという環境ができている。だからこそ、学術的なアプローチをとりながらも自由度高ささまざまな活動に取り組んでいるのかも。

橋 上野PJでは、「しのばずいけまち研究会」という商店会の人たちが集まる勉強会が月に一度くらい開催されているのが大きいかもしれないね。その組織が既に確立されていて、そこに働きかけると割と色々なアクションを起こすことができるという環境ができている。だからこそ、学術的なアプローチをとりながらも自由度高ささまざまな活動に取り組んでいるのかも。

阿子嶋 勉強会という形をとっているのが、大学側としても先端的な事例を持って行ったり、専門家の人を呼んだり、これからの街をどうしていくかを学術的に考えている。社会実験は、提案が実現しそうかどうかを測るものという位置付けだから、ある意味アカデミックなプロセスだと感じている。

橋 その道路空間に関わる「しのばずいけまち研究会」とは別に、「アーツアンドスナック運動」という、スナックなどを活用する団体があり、2つ研究会がある状態。上野プロジェクトとしては6年目くらい。

伊藤 数年で研究会がふたつも確立され始めているスピード感は、場所が東大から近いというのが大きい要因になっていると思う。

音山 社会実験の調査や実測にすぐに行けて、色々な時間帯のデータも取りやすくていいね。

伊藤 かなりコンスタントに継続して社会実験の検証ができるというのが他のプロジェクトとの違いかもしれないね。地元の人との関係づくりにおいてもプラスかも。

佐橋 実際にピースオブピアのような社会実験を行っている街の様子を継続的に見ている、何かが変わっている実感はある？

伊藤 まだ目に見えて何かが変わったということはないが、少しずつ変わってきている感覚はある。それよりも、みんなの中で、普段とは全然違うこんな空間ができるんだ、これも変わるんだという共通意識を経験できたのが大きいと感じている。ポテンシャルの確認という意味でも。実績作りにもなっていると思う。

長期計画を見据えての社会実験 またその恒常化に向けてどう動き出すのか

永井 その意味ではみなかみでこの前開催したマルシェも一緒。一方で、あの一時的な実験がゴールだと思われてしまったという問題点もある。住民の方々の中には、プロジェクト自体が終わったと勘違いしている人もいて、これからも継続してこの街に足を運ぶという驚かされたりする。元々は、今回マルシェで使っていた場所を改修してゲストハウスなどの形で長く使うという長期プランを見据えての今回の社会実験だった。

永井 長期プランを現実的に考えると水回りが整っていないなどの問題点があるので、継続的に使うためには、ここで生まれる利益がその改修費を上回る見込みが必要。その見込みを立てる上でも実際に活用してみる、今回のような機会が大切だった。

伊藤 その点、社会実験のような一時的な利用であれば揃っていないものがある程度作り上げることができる。それが社会実験の強みでもあり、難しさでもあると思う。恒常化に向けてどのようなプロセスを踏めばいいかを考えていかなきゃいけないね。

永井 学術的な貢献という観点から話すと、今回のみなかみPJでやったような社会実験でどのような学術的な貢献ができるのかについて今話し合っているところ。上野であれば、交通などについて言えることが多そうだが、みなかみの社会実験でそれを測っても今回限りのイベントで、常にやっているわけではないからそんなに意味がない。イベントをやったときにどうなるかということはあるが、このようなイベントを今後続けていくのかも未定だし、どういう面から学術的な貢献ができるか悩んでいる。

音山 社会実験は、別に1日だけのワークショップとかだけではないよね。普通の街並みに少し手を加えたらどう違うか生まれるか、などを、継続的に何日もかけて、ある目的意識と仮説のもとで変化を観察してデータをとるといった形をとれば、その悩みは解消できそう。

永井 それが今のみなかみPJの段階だと、継続的に変化を見たくても人がいない。まだ地域の人が運営に入ってきていないので、学生がいなくなったら完全に活動が終わってしまう状態。その点、手賀沼PJはもう地域の人の運営に移行しているんだよね？

佐橋 やっている内容にもよるが、地元の組織とその組織がやっている活動がある。中心となってやってくれる主体が現地にいるから継続して活動が続いていて、現在自分たちはその活動に参加したりしている状態。



廃墟の掃き出し窓を出店ブースに再生させた様子

特定のまちに対する課題解決手法は、
その他のまちにも応用できる？

橘 社会実験の後をどうしようかという議論は、どのプロジェクトでも出ている。**上野PJ**では、目的意識を持って照明実験をやったが、あれが日常的になるのはどうなんだろうという疑問の声も出ている。

長谷川 そのような意見をどこまで取り入れるのが難しい。全員の意見を取り入れるわけにはいかない部分も多いよね。

佐橋 一般的に、新しいことをやると、結構変化を嫌がる人からの反対意見も生まれる。その声の多い少ないが重要だったりする。それを試す場でもあるよね。

伊藤 まず、「社会実験」という名前からしてすごいよね。実験というと、普通は実験室の中でやるものを思い浮かべるけど、それを社会でやるのが都市工の面白さでもあると感じている。反対意見が出るとかそういうのは、そういう特殊さだからよね。大変だからこそ、やりがいがあるのかな。

長谷川 まず定量的にできないものが多いというのはあると思う。定性的なものに基づいているからこそ、結局場作りだけで終わってしまっている印象を受けられてしまうことがあるんだと思う。測る対象が明確でなく、来てくれた人の意見ベースで進んでいくことが多いので、結局どのようにしてデータとして蓄積させていくかが難しいと感じている。

音山 修論のスタンスもそれに似ているなと思っていて、街って結構特殊解的な側面があるから、プロジェクトでも修論でも、その場で課題を見出して解決していくようなイメージ。街のポテンシャルを引き出すという観点ではそれでいいと思うけど、他への応用が効きづらいよね。手法を参考にすることはあるかもしれないが、学術的なネットワークが構築しにくいな。



子どもたちで賑わうまちにわ



座談会の様子

伊藤 学術的なネットワークって、どのような形で応用することができるのかな？得られたデータがその場その時の状況に依っているよね。

永井 逆に言えば、それが都市デザイン研究室なのかなと思う。都市に関わっている時点で、都市ごと違いは現れて当然というか…

佐橋 逆に自分は以前担当教授に、一般論的なことをやっても面白くないと言われたことがある。一般論で当たり障りもないことを論文にするよりは、特定の地域に絞り、その地域だからこそ見えることを明らかにする方が研究として面白いんじゃないかな。

橘 「〇〇プロジェクト」として、〇〇に対象地の名前が入っている時点で他のところに応用しようという観点はあまりないというのがわかるよね。2つのプロジェクトに参加していたら「これはもう一つの方でも活かすことができそうだな」みたいになることがあるかもしれないけど、1つしかやっていないと応用する機会もないというか…

伊藤 いくつかの地域を掛け持ちして関わりを持っていると、その一般論みたいなものが見えてきやすくなりそうだね。

プロジェクトにおける
行政や、地域で暮らす人との関わり方

橘 自分が参加しているプロジェクトである上野PJと富士吉田PJでひとつ大きく違う点は、**富士吉田PJ**は行政の方々と共同してやっているから、**上野PJ**よりも行政が

とても近いところにいるということだと思う。もともと行政からお願いされてやっているという形をとっているんだよね。

佐橋 それはプロジェクトとして進めやすそうだね。元々課題がはっきりしているとそれに向けて動けるが、そういうのがないと、何か自分たちで課題を見つけないとやるのがなくなる。

伊藤 行政と協働していると社会実験が目的化しやすいという一面があるのかも。行政を説得させるためにデータを集める、みたいな段階が、そうじゃないプロジェクトよりも少ないんじゃないかな。だからこそ、地域の方々と関係づくりがメインになってくる。それに加えて、予算をもらったから何かしらやらなくととか、実績作りが必要みたいな側面もあると思う。

音山 プロジェクトの入り方次第で住民のまちづくりへの印象が結構変わりそうだなと感じている。行政が外部組織と連携してまちづくりをやるとき、一般的にそこに住民が入る余地がそんなにない印象がある。行政から始まると、住民が積極的に「自分たちもその活動に参加していきましょう！」みたいな意識が生まれづらそうな気がする。社会実験が目的化しやすい一端もここにあるのではないかな。

永井 **みなかみPJ**は、プロジェクト自体がオープンハウスという会社から始まっている、事業から始まっているから、住民との乖離が大きい気がするな。

社会実験を通して生まれつなかりを
どのようにして今後の活動につなげるか

長谷川 データなど、定量的なものではなくても、社会実験などでイベントを開催することによって生まれる人とのつながりはあると思う。今までアクセスできていなかった人たちに活動そのものを知ってもらう機会にもなるよね。

永井 **みなかみPJ**でやった今回の社会実験の反省点として、来てくれた方々に、将来ビジョンを見据えての段階であることを伝えなかったから、これが完成形であると思われてしまったという点が挙げられる。自分たちの中では位置付けはちゃんとあった者の、それが地元の方々に伝わってなかった印象。今後もこの活動を新たな主体が引き継いでくれるには、もう少し地域の人と仲良くなる必要があるかな。住民の方々に嫌われたら終わりだ、と地元の方に沢山言われた。若い、動ける、運営できるプレイヤーの方々と仲良くなって行けたらいいな。

高野 自分は、地域に外から入るものとして地域の方との関係をどう築いていけるかについて最近よく考えている。社会実験とかも、プロジェクトの目的などを地域の人と共有しながらやっていけたらいいよね。仲良くなるには、まずは対面して話すことが大事なのかな。

音山 確かに、地域の人との関係の中での顔役みたいな存在は必要だね。外から地域に入るに当たって不可欠な、地域の人との継続的なコネクションをする役としても必要だし、新しい人が入ってきたときに紹介するみたいな役割もあると思う。

永井 自分の住む地域にある日突然外部から人が入ってきて活動する、ということに住民の方が不安を感じるのは当然のこと。住民の方々の不安の解消に努める必要があるね。

長谷川 現地に足を運んで面と向かって自分たちの活動に対する誠意を見せることで、不安の解消に止まらず活動に協力・応援してくれるサポーターを増やしていかないとね。まずは、この先この街でどんな活動をしていく予定なのか、そこで暮らす人にちゃんとお伝えすることが大切だと思う。

これからもPJ活動を続けるm1メンバー
今後の活動に向けての思い

阿子嶋 自分は、住民が参加者である以上、社会実験というよりはイベントになるのかなと考えている。持続的なまちづくりをしていくには、住民の方々などが徐々にプレイヤーになっていかなきゃいけないなと思っていて、そういう意味では社会実験は将来的な絵を見せるという意味と、街の機運を高めていくある種の装置という意味があると思う。ビジョンに対して共感してくれる人をどんどん巻き込んで、次はそういう人たちも運営にまわってくれるみたいな流れを回していけたらいいなと思うし、その流れを作っていく必要があるよね。

永井 活動に対して、そんなに悲観的に考えなくて良さそうだね。

音山 積極的に活動してくれる住民や私たち学生がいくら頑張っても限度がある、大事なものはそこで暮らすお年寄りにどう火をつけるのかだと聞いたことがある。本当に街にとっていい、面白いことができるポテンシャルを持っているのは、自分たちじゃなくてその場所に長い間住んできた住人たちだから、自分たちの役割はどうそのポテンシャルを引き出すか、その人たちをどうまちづくりの場に引っ張ってくるか、なんじゃないかな。

長谷川 起爆剂的に、地元の方々のまちづくりへの機運を高めて、どのようにこの先まちを作っていくかの手法を一緒に考え、伝えるところまでを私たち大学院生がやる。そのあとは関わっている間に、地域だけで回る仕組みをどう作れるか、に掛かっているのかな。



地元の織物産業の布でミチを彩る

橘 逆に地元の人が気づいていないことを、外部の目線で再発見する、認知されてなかった魅力を掘り出すという意味もあるよね。

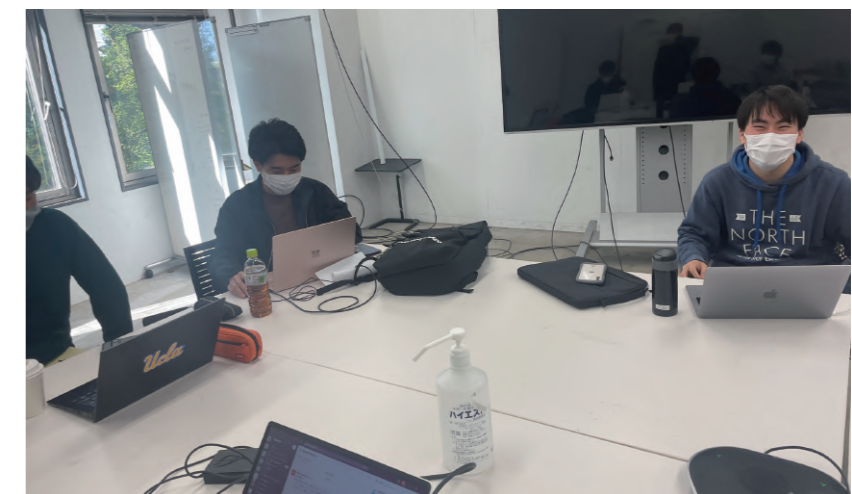
永井 外からの目線って言うと、「外からの目線であれば誰でもできる、大学生じゃなくてもいい」と言う人もいる。都市学んできた学生だからこそ着目できる視点が見せられたらいいね。

伊藤 “実験”って何かと考えていたが、やっぱり仮説を持って何か変化を起こして検証するのが実験だと思う。その意味で、社会実験においても仮説をつくる段階が大切で、立てた仮説をもとに実際にやってみて、それが良いねとなったら、それに向かって動き出していく。だから、社会実験は起爆剤という意味合いもあるのかな。

長谷川 単に地域にとってだけではなくて、学生の活動それ自体にとっても起爆剤となると思う。仮説や検証のプロセスを描くことで改めて普段の活動の目的や意義を見直すいい機会になるね。うまく活用できそう。

伊藤 こうやって改めてお互いに議論し合いながら今の自分の活動について考えることで、自分の中でも整理がついたと思う。これからは頑張ろう！

長谷川 本日はありがとうございました！



座談会の様子

備忘録 - 修士2年生6名、1年半の活動期間を通して -

都市デザイン研究室の学生が、院生生活の多くを投資する「まちづくりプロジェクト活動」。10-11月で全てのPJから修士2年生が引退しました。しかしその各々が「都市」との関わりはどのようなかたちであれ継続していくのでしょうか。ここで、一旦の引退を迎えての率直な心情を綴ってもらいました。

Question

- ① PJ 期間を通して感じた学びや印象的な出来事
- ② 上記備忘録のタイトル
- ③ 心に残っている写真1枚か2枚



神谷 南帆
Naho KAMIYA
▶ 富士吉田 PJ
みなかみ PJ



外からの視点と内としての関わり

地域の”当たり前”を固有の宝として掘り起こし、何らかの形に見せることで価値を伝える、この共有ができた瞬間こそ大きな喜びだった。外の立場としての目を持ちつつも内の立場として丁寧に関係を築いていく、PJを通して学んだこの姿勢を忘れずにいたい。



合田 智揮
Tomoki GODA
▶ みなかみ PJ



当事者として体験したまちづくり

大学院で何してるの、と知り合いに聞かれたときに、自分でもよくわからないまま「まちづくり」と答えていました。PJを終えた今、昔よりも手応えと密度をもってその言葉を認識できている気がします。まちの社会・政治・経済の中に入り浸った1年半でした。



杉本 莉菜
Rina SUGIMOTO
▶ 宇治 PJ



自走の勢いづけを場づくりから

何より印象的なのは拠点となる施設活用を考えるとところからつくる、つかうまでを地域の人たちと一緒に積み重ねて来られたことだ。今では地域の人々がまちを自ら抱えこなし、未来が容易に想像できる。少しでもその基盤づくりに携われたことを嬉しく思う。



劉 嘉林
Karin RYU
▶ 上野 PJ
宇治 PJ

理論の外にあったもの

地元の人々との交わりの中に多くの発見がありました。実際にまちに暮らす人々の多様な感情に触れ、ショックであったと同時に面白く勉強にもなりました。理論的に正しいことが必ずしも受け入れられないことにどう向き合うかは今後の大きな課題になると思っています。

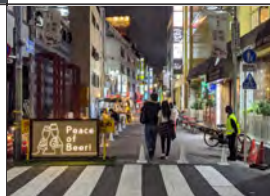


若松 凧人
Nanato WAKAMATSU
▶ 宇治 PJ



その風景にそっと触れてみると

日常でもなく、一度きりでもない。そのような距離でまちに触れたのは、PJが初めてだった。そっと、でも確実に、そのまちの感触を覚えていく。そうして身体に染み込んだものは、また他の風景と出会うとき、確かなよりどころとなるだろう。



渡邊 大祐
Daisuke WATANABE
▶ 上野 PJ
みなかみ PJ



でもなんだかんだ楽しかったです

試行錯誤・議論を繰り返して、強度のあるコンセプトを練り上げること。関係者や住民と膝を突き合わせ、想いや要望を1つ1つ汲み上げること。限られた予算の中で、丁寧に空間をつくり込むこと。その必要性和実力不足を同時に感じる、そんな1年半でした。



COLUMN

POSTSCRIPT

日々沢山の時間をかけて取り組んでいるからこそ、その意義を見失いたくないと思いついてこの座談会を企画した。こうして改めて活動を見直すことで、本質に立ち返る良い機会になったと思う。プロジェクトに限らず、最後の学生生活、目の前のことに誠心誠意取り組むながらもただそれを追うだけでなく、長期的なビジョンを見据えて思考しながら、ひとつずつステップを踏んでいきたい。(M1 長谷川)

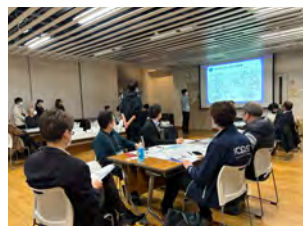
WEB MAGAZINE

続きは都市デザイン研究室 HP で! >>>
<https://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/>



まちにわ WS 第5弾

第5回目となる今回は中宇治に点在する「まちにわ」を繋げることを目指し、ふれあいセンターを始点として複数の会場を拠点としました。天候は雨だったものの、多くの方々が来場し大盛況でした。(M1 佐橋)



不忍通り意見交換会!

都の事業の整備路線に選ばれた不忍通りの、通りの印象やこれからの道とまちのあり方について、地元の皆様と地図や模型を囲み話し合いました! 意見を反映し整備が進められることを目指します。(M1 高野)

BOOK OF THE MONTH



自然の家
フランクロイドライト
富岡義人訳
筑摩書房
2010
推薦者
M1 永井

20世紀を代表する近代建築の巨匠・フランクロイドライトの集大成として出版された本。彼の目指した有機的建築とはなにか、「形態は機能に従う」とはどういうことか、それら理念を教えてください。では、『自然の都市』とは一体どんな都市なのだろうか。